

教育評価の新たな展開

—新しいタイプの学生の出現、ニセ優等生？ 消費者？ 宇宙人？—

生涯学習学科助教授 原 清 治

hara@bukkyo-u.ac.jp

佛教大学非常勤講師 藤 田 智 之

fd-tech@bukkyo-u.ac.jp

要 約

本研究は学生の授業評価アンケートの結果に注目し、学生がどのような授業をいかなる基準によって評価しているのかを分析したものである。データからは、昨今の学生が、授業に対してこれまでとは異なる意識を持ち始めていることが明らかとなった。すなわち、以前のような「楽勝型」といわれる授業ばかりが高評価の上位を占めているのではなく、「厳格型」とよばれるような授業も上位にランクされはじめたの

である。そこには、社会の変動に伴った学生の気質や意識の変化があり、具体的には、「ニセ優等生」タイプ、「消費者」タイプ、いずれの категорияにも属さない「宇宙人」タイプの学生が出現し始めていることが明らかとなった。

キーワード：

FD（教授法開発）・授業評価・教育の評価・楽勝型授業と厳格型授業・消費社会

はじめに

今日ほど社会変化の激しい時代は他に類を見ない。高度情報化、国際化、価値の多様化、少子化などの影響によって、高等教育機関である大学においてもその変化への対応が求められるようになってきた。

浜野一彦（1987）によれば、これまでも大学の変化はさまざまな要素によってもたらされてきており、たとえば日本においては「大学の 대중化にともなう学生、ひいては大学教員の量的拡大や質的变化」の時代、「1960～1970年代の学生運動・大学紛争を契機とする大学教育に対する改善要求」の時代に並んで、今後は「一層の深刻化が予想される大学のサバイバル」の時代において、大学をめぐる社会的情勢の変化が起こることを論じている⁽¹⁾。経営を念頭に置いた大学の改革は、従来ならば高等教育機

関に進学し得なかったタイプの学生が大学に入学することを可能ならしめ始めたが、こうした高等教育の機会拡大は、一方で、大学教育の質の維持を同時に両立させることが極めて困難となる状況をもたらしたのである。その打開策のひとつとして、ファカルティ・ディベロップメント（Faculty Development、教員による授業方法の工夫改善のこと。教授法開発ともいう。以下、FDと略記）活動が、各大学で積極的に論じられるようになってきたのである。

この場合、「顧客としての学生」や「学生サービス」という、これまでおよそ大学関係者にとって聞きなれなかった視点が求められることになる。それは、喜多村和之（1987）が繰り返し論じてきた、教育サービスを求める受け手としての「消費者」の存在を認めることであり⁽²⁾、大学経営者にとっては、教育の内容や

方法、クラブやサークル活動など、学生生活全般に対する学生の満足度をいかに高めるかが重要な課題とされるようになってきたことを意味するのである。

大学の生き残りをかけたFD活動の重要な施策のひとつに授業評価がある。これは、教員にとっては自分の授業が学生にどのように評価されているのか、改善・工夫すべき点はどこにあるのかを知るためのものであり、学生の側に立てば、大学生生活の満足度を学業の面において高めていくための試みであり、正当な「異議申し立て」の機会である。今までは、こうした授業に対する改革の意識が教員側、学生側ともに希薄であったし、本来、授業の方法や内容は、教員の一方的な教育権のなかにあった。しかしながら、大学の授業を「教育」という視点から見れば、また、大学を研究機関としてだけでなく教育機関でもあったと考えれば、授業や教育のあり方や内容・方法への学生の関わりは無視できない。そのため、90年代に入ると多くの大学では、学生の授業アンケートを実施し、学生の満足度を高めるための方途を模索してきたのである。

そこで本研究では、この授業アンケートに着目し、学生の授業に対する意識の変化を分析し、さらに学生が求める「望ましい授業」がどのような変数から構成されているのかについて考察する。その際に、学生のタイプによって授業へのニーズが異なっていることを仮説として設定する必要がある。すなわち、これまでの授業評価に関する先行研究で用いられてきたような、「学生」をひとくくりにして分析する方法ではなく、学部・学科構成による差異や出席率などによってグループ化された変数を独立変数として投入することによって、「新たな学生」群ごとによって、それぞれがどのように授業に対する認識を持っているのかを分析することが可能となった。

なお、本稿で取り扱う「学生」とは、どのような時代にも普遍的に存在する「不真面目型」（授業には出席しない、私語などで他人に迷惑をかける、課題などに真剣に取り組まない、など）の学生は含まないものとする。なぜならば、彼らからの授業評価は、あいまいだけでなく、分析の対象にもなり得ないような回答が含まれることが少なくないからである。（本稿は、原清治と藤田智之の共同研究の成果であり、その責任は両者が等しく負うものであるが、執筆分担は、原が、はじめに・1・2・6・7を担当し、藤田は、3・4・5を分担した。）

1. 授業評価に関する先行研究

授業評価に関する先行研究は、1980年代から多くの研究者によって学生の実態とともに明らかとされてきた。ここでは、大きく2つの流れに焦点をあてて論じてみたい。

ひとつめは、中野収（1987）⁽³⁾や島田博司（1991）⁽⁴⁾、荻谷剛彦（1995）⁽⁵⁾などによる調査研究である。これら一連の調査を第1群とする。

第1群の調査は、授業に対して「楽しさ」や「面白さ」を追求する学生像を浮かび上がらせている。レジャーランド化した大学では、単位のとりにやすい「楽勝型」授業に高い評価が示された。94年の関西大学社会学部の調査⁽⁶⁾は、この当時の学生の授業に対する意識を端的に表している。

例えば、「どの授業も出席をとるようにしてほしい」は、賛成7%、反対66%や「課題や予習義務を課してほしい」は賛成5%、反対67%にのぼった。あくまで一学部の調査結果ではあるが、出席をとられることや課題を課されることを忌避する大学生の本音を見て取ることができる。また、中野（1987）や島田（1991）の研究からも、「楽しさ」や「面白さ」を追求する学生の実態が論じられ、蔓延する私語やゼミ

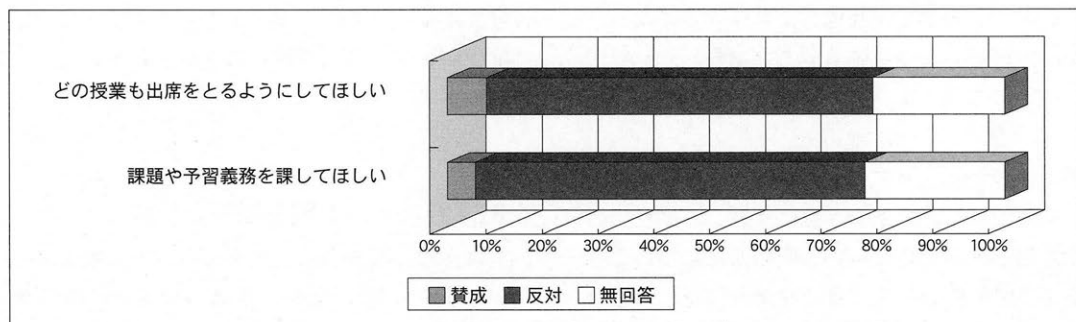


図1 関西大学社会学部調査 (1994)

出典：苅谷剛彦編『キャンパスは変わる』玉川大学出版部 1995年より作成

への関わりの無気力さ、面白くないことは無視するといった大学生の履修実態が報告されている。苅谷(1995)も「楽勝系の授業の情報が履修基準となり、試験前にはシケプリが配られ、大学の4年間はなるべく楽に単位を取得して卒業する「余暇」の時間であるべきだと考えられていた」⁽⁷⁾と論じている。この当時の学生は、「楽勝型」の授業を好んで選択し、学ぶことを強制される要素には総じて批判的な見方をしていたようである。こうした背景には、高校まで詰め込み型の教育を強制されてきたことへの反発や、受験勉強への反作用があるが、同時に、大学の授業にも「楽しさ」という新たな評価基準を求め始めた時期であるということもできる。

もうひとつの流れは、一般教育学会(現、大学教育学会)が中心となって行なってきた研究であり、これらを第2群とする。たとえば、安岡高志らの研究(1986)⁽⁸⁾によれば、形態的には少人数制の授業に対する評価が高いことと同時に、学生が「集中した」と実感できる授業において評価が高かったことが明らかとなった。また、同年に実施された別の調査⁽⁹⁾では、データ数が少ないながらも、授業評価の高さを示す変数の構成要素として、「明快性と構成のよさ」、「効用性」、「刺激や興味」といった項目に

高い数値が示されることが報告された。

また、時間割との関係によって授業評価が変動することや⁽¹⁰⁾97年には、これまでと異なり、「満足できない」授業の要因の分析がなされている。結果としては、「教科書通りの授業」や、「暗記中心ばかりの授業」「実践的実験が少ない」などがあげられ⁽¹¹⁾、学生からの授業に対する要望が具体的な形で見え始めた。加えて、平野真(2000)は、教育技術が授業評価に高い影響を及ぼすことを指摘している⁽¹²⁾。

これら第2群の先行研究は、学生の変化というよりは、もっぱら教授者側に求められる「教育」の方法をめぐる議論であり、学生の興味を喚起するためにはどうすればよいのかといった昨今のFDをめぐる中心的な議論の端緒となった。

こうした先行研究からの知見をみても、この20年間で、大学生の意識が大きく変化してきていることは明らかであり、その背景に「バブル経済」の隆盛と衰退という大きな社会変動や、18歳人口の減少と「大学冬の時代」の到来によってもたらされた大学側の経営をめぐるロジックの変化があることは論を待たない。さらに昨今の不況が、学生の就学意識に大きな影響を及ぼしているのではないかと考えることは必然の流れであろう。それでは、どのような新

しいタイプの学生が登場してきているのだろうか。本研究のもつ意味もそこにある。

2. 研究のフレーム

本研究では、以下の3点に着目し、学生の授業評価基準の変化について明らかにしていく。従来までの先行研究では、授業評価を論じる場合、①のように「出席をとる・とらない」(あるいは、課題や小レポートを頻回に課すなど)といった学生への負荷のかけ方を巡る問題や、②のように最終の成績評価が「厳格か甘いか」によって、学生の授業選択が変わるという問題に着目した研究がもっぱらであった。しかし、安岡グループの調査からも明らかなように、今後は教育技術や方法といった視点も踏まえながら分析しなければならない時代になってきたといえる。そこで、教え方に工夫があるか否か、授業に熱心か否かといったような、「授業」という新たな軸を考察の一軸に加えることで、授業評価を重層的に分析することが可能となり、これまで見えてこなかったような新しいタイプの学生の存在を考察することができるのではないかと考えた。そこで、この3つの分析軸を研究のフレームとし、仮説には「学生のタイプによって授業へのニーズが異なっているのではないか」を設定する。研究方法は、授業アンケートの結果を用いて、学生の授業に対する意識を

分析するとともに、学生が求める「望ましい授業」がどのような変数から構成されているのかについて考察する。

3. アンケート調査概要と分析

京都市にある私立A大学において、授業アンケートを実施した。内容は、学生の「受講態度」に関する項目(4択15問)、「授業内容」に関する項目(4択4問)、および(2択16問)の全35問である。

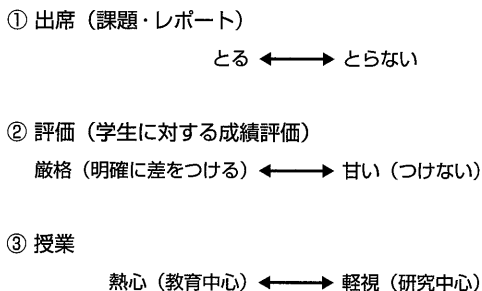
調査対象は、共通科目159、専門科目340の全499科目、回答者数は22,495名であった。調査時期は2003年6月23日～7月12日である。分析方法としては、調査統計パッケージSPSS11.0J for Windowsを使用した。

4. 分析

アンケートの分析では、まず、学部別・出席率別を独立変数とした考察をおこなう。先行研究からは、学部によって、学生の受講態度や意識に差異が認められるといった指摘や、出席率の低位な学生の授業アンケートは信頼性が低い、といった考察がしばしば見られるからであり(安岡、2000)、今回のデータからも同様の結果を得ることができるかを検証するためである。

(1) 学部別の分析

まず、学部別の比較を図2、図3、図4に示した。文学部、社会学部はほぼ同じ形状のデータを示す傾向が見られるのに対して、教育学部だけがややそれを異にしていることがわかる。すなわち、「教員免許や諸資格の取得のため」や、「進路や就職に役立つから」といった理由がその講義の受講を決めた動機となる傾向が強く、学習目的や意識の面で他学部生よりもやや



サンプルの属性

表1 学科別サンプル数

学 科	度 数	パーセント
仏 教	2065	9.2
史	2476	11.0
日 文	1897	8.4
中 文	539	2.4
英 文	1103	4.9
教 育	1921	8.5
生涯学習	1248	5.5
臨床心理	557	2.5
社 会	3031	13.5
応 社	2167	9.6
社 福	2538	11.3
健 福	2007	8.9
その他	140	0.6
欠損値	806	3.6
合 計	22495	100.0

表2 講義別サンプル

講義種別	度 数	パーセント
専 門	4651	20.7
一 般	15187	67.5
語 学	2657	11.8
合 計	22495	100.0

表3 性別別サンプル数

性 別	度 数	パーセント
男 性	9334	41.5
女 性	11956	53.1
合 計	21290	94.6
欠損値	1205	5.4
合 計	22495	100.0

表4 回生別サンプル数

回 生	度 数	パーセント
1 回生	6336	28.2
2 回生	7187	31.9
3 回生	5660	25.2
4 回生	2267	10.1
5 回生以上	159	0.7
大学院・科目履修生等	129	0.6
合 計	21738	96.6
欠損値	757	3.4
合 計	22495	100.0

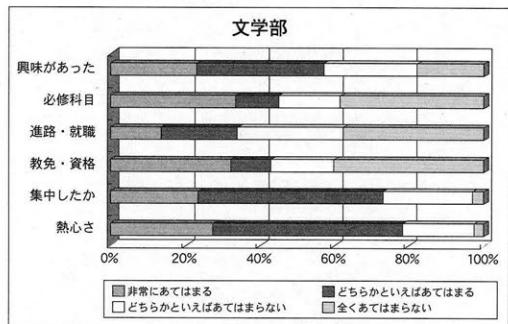


図2 文学部受講態度

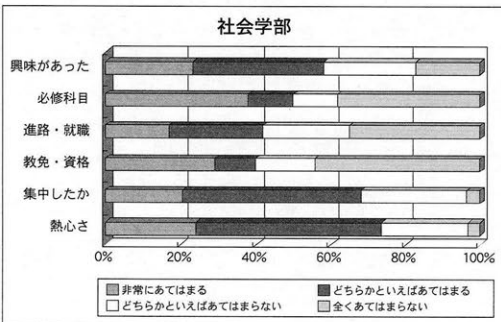


図3 社会学部受講態度

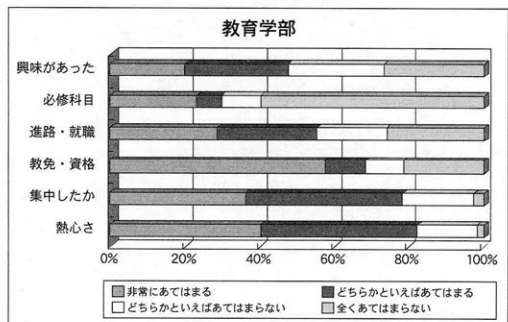


図4 教育学部受講態度

現実的な側面をみせている。これは、教育学部の特徴でもあり、臨床心理士を志す臨床心理学科の学生や、社会福祉士を目指す社会福祉学科の学生にも一部同様の傾向がみられる。また、こうした学部別による差異は、授業の理解度や満足度においても同様の結果がみられる。教育学部や社会福祉学科などの学生が、将来の職業的な目標を明確に持ち得ることと無関係ではなからう。

(2) 出席率別の分析

次に、出席率別によって比較してみたい。出席率のカテゴリーは、アンケート項目の中にある「あなたは、どの程度この授業に出席しましたか」を用いて「出席率」という新たな変数を作成した。その率によって、良好なものから順に「上位」「中位」「下位」の3段階に分類し、そ

れを分析の際の独立変数として投入した。

結果は、図5～図8にみられるように、出席率の上位・中位・下位グループによる明らかな差がみられた。とくに、「居眠り」「集中」「熱心」といった受講態度では、上位グループと下位グループの差は顕著となる。すなわち、出席率が良好な学生ほど授業評価においてポジティブな反応を示し、中位と下位グループとの間に大きな断点を見て取ることができたのである。出席率によって、授業の評価が変動するのではないかと、という安岡グループの指摘は、本データにおいても検証された。

では、この出席率に影響を与える要因は何だろうか。『授業を変えれば大学は変わる』によれば、大半の学生たちが「受け身」であることは間違いなが、そんな学生でも「興味」さえ湧けば勉強したいと思っており、教員の授業に

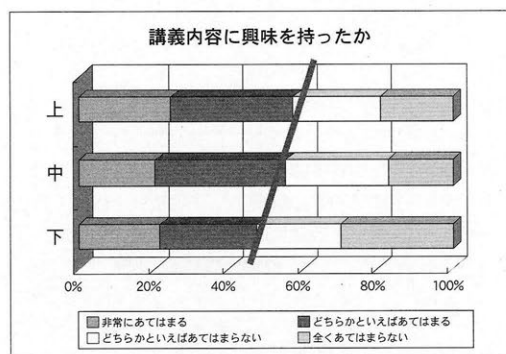


図5 出席率別 受講態度 1

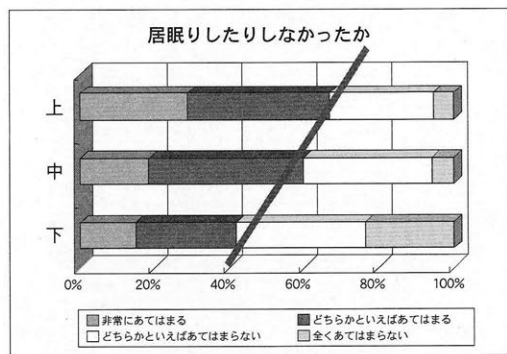


図6 出席率別 受講態度 2

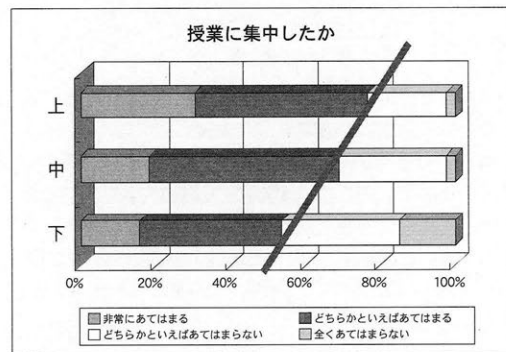


図7 出席率別 受講態度 3

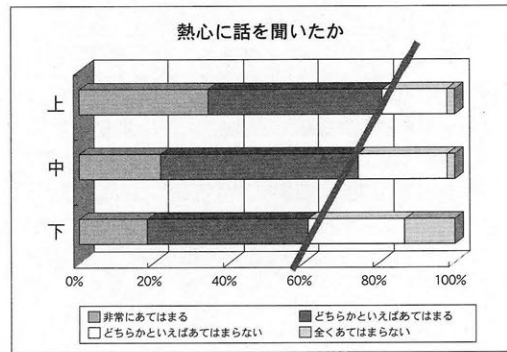


図8 出席率別 受講態度 4

対する熱意が高いほど、この興味への誘いが起りやすいことを指摘している(安岡、1999)。

すなわち、教員にとって、出席を義務付けるよりは、熱心に教育することが結果的には学生の学びを喚起することになり、本データが示すような「よい授業」が「高い満足度」を示すという好循環を生み出すのである。

(3) 評価の高い授業の要因分析

次に、授業内容の平均点から評価の高かった授業の成績指標を提示し、学生がどのような要因から、どのような授業に高い評価を行ったのかについて考察してみたい。

表5は、授業評価のアンケートを再分析し、項目ごとに得られた得点を合計することによって総合的な授業評価の合成変数を作成し、それを得点順にソートしたものである。いわゆる単純な「ベスト講義」のリストと読み替えることもできる。さらに、その講義シラバスから、成

績評価の基準となる指標を取り出してみた(この場合は、出席・テスト・レポート・発表がそれぞれ成績評価にどの程度のウエイトを占めているのかのリストと、さらに備考覧に何が特記されていたかをまとめた)。

この表をみると、従来から厳しいと言われる、「毎回出席をとる・小レポートを頻回に課す・テストあり」といった授業(以下、「厳格型」)が上位にランクしていることがわかる。また、講読やフィールドワーク系の講義も多数ランクインしている。これらは、一方的な講義形式ではなく、発表や討論など学生が主体的に関わることが前提となっている授業である。

また、表6、表7は、出席率を上位群と下位群のふたつのコーホートに分け、それぞれを分母とした授業評価ランキングである。出席率によって好まれる(評価が高い)授業が異なっているのではないか、という仮説に基づいて分析した結果、やはり出席率上位群と下位群とで

表5 成績評価の指標(ベスト20位)

順位	科目名	受講者数	対象学部	出席	テスト	レポート	発表	備考
1	A講読	31	教育	30	30	40	0	毎回レポート
2	B特殊研究	86	教育	30	40	30	0	発表
3	C専門教育	43	教育	50	0	50	0	フィールドワーク
4	Dと職業	64	共通	50	0	50	0	
5	E教育法	40	教育	50	0	50	0	
6	F教育研究	89	教育	10	60	30	0	文献熟読
7	G文化講読	35	文学	0	0	60	40	各自発表
8	H方法学	202	教育	50		30	10	遠隔学習(10)
9	I文学講読	32	文学	0	64	36	0	毎回のレポート
10	J教育論	90	教育	30	40	30	0	文献熟読
11	Kレクリエーション	40	教育	50	0	50	0	フィールドワーク
12	Lの研究	66	共通	15	60	25	0	
13	M学概説	65	文学	30	0	70	0	フィールドワーク
14	N情報機器	46	教育	30	0	70	0	
15	O教科専門	39	教育	0	70	30	0	小テ20・期末50
16	P教科教育法	97	教育	0	0	100	0	小レポート20点
17	Q原理	88	社会	0	50	50	0	
18	Rの研究	71	共通	15	60	25	0	
19	S教育専門	50	教育	40	0	60	0	
20	T学論	108	文学	30	70	0	0	出席カードに感想

表6 出席率上位群ランキング

順位	科目名	受講者数	対象学部	出席	テスト	レポート	発表	備考	順位	科目名
1	A 講読	31	教育	30	30	40	0	毎回レポート	1	A 講読
2	B 特殊研究	86	教育	30	40	30	0	発表	2	B 特殊研究
3	C 専門教育	43	教育	50	0	50	0	フィールドワーク	4	D と職業
4	D と職業	64	共通	50	0	50	0		6	F 教育研究
5	E 教育法	40	教育	50	0	50	0		8	H 方法学
6	F 教育研究	89	教育	10	60	30	0	文献熟読		
7	G 文化講読	35	文学	0	0	60	40	各自発表		
8	H 方法学	202	教育	50		30	10	遠隔学習(10)		
9	I 文学講読	32	文学	0	64	36	0	毎回のレポート		
10	J 教育学論	90	教育	30	40	30	0	文献熟読		

表7 出席率下位群ランキング

順位	科目名	受講者数	対象学部	出席	テスト	レポート	発表	備考	順位	科目名
1	A 講読	31	教育	30	30	40	0	毎回レポート	16	W 中等教科教育法
2	B 特殊研究	86	教育	30	40	30	0	発表	13	M 概説
3	C 教科専門	43	教育	50	0	50	0	フィールドワーク	7	G 学講読
4	D と職業	64	共通	50	0	50	0		3	C 専門教育
5	E 教育法	40	教育	50	0	50	0		4	D と職業
6	F 教育研究	89	教育	10	60	30	0	文献熟読		
7	G 学講読	35	文学	0	0	60	40	各自発表		
8	H 方法学	202	教育	50		30	10	遠隔学習(10)		
9	I 文学講読	32	文学	0	64	36	0	毎回のレポート		
10	J 教育論	90	教育	30	40	30	0	文献熟読		

は、評価が高い授業に違いが現れた。表6の上位ランクでは、厳格型の授業の評価が高く、全体ランキングの上位授業がほぼそのままランクインしていることがわかる。

しかし、表7の下位コーホートのランキングでは、評価項目には「テスト」がなく、「レポート」や「出席」に高い配点が置かれる授業を好む傾向が読み取れた。また、「フィールド

ワーク」や「発表」を課す授業もランクアップしていることがわかる。結果的に、出席率上位群と下位群とでは、評価が高い授業の構成要素が異なることが明らかとなった。このような、出席率によるコーホート分析を行なうことによって、従来までのようなさまざまな学生をひとくくりとした授業評価では得られなかったものがみえてくるのである。

これらの結果からは、学生の評価の基準は多様化しており、より詳細な分析が必要であることがわかる。そこで、さらにこうしたデータの背後に潜むものを探るため、学生に授業に対する意識や目的等についてのインタビュー調査を行なった。それは、質問紙調査という「量的」データだけではとらえきれない学生の実態や像を「質的」に明らかにすることをねらいとしたものである。

5. 新しい学生の出現

インタビュー調査を行なった結果、これまでの先行研究では分類、説明できない学生の存在が点在していることがわかった。それを、ここではひとまず「ニセ優等生タイプ」、「消費者タイプ」、そうしたタイプのどれにもあてはまらない「宇宙人タイプ」と命名し、それぞれに具体的なインタビューの内容を示しながら考察してみたい。

(1) **学習者タイプ**（まじめで優秀、これまでの先行研究でも普遍的に存在していたタイプの学生、以下の分析のためにこのタイプも合わせて考察）

(質 問)：授業に対してどのように考えていますか？

(回答1)：勉強するために大学に入学した。だから、授業は真剣に聞いています。

(質 問)：大学生活の中で授業の位置づけは

(回答1)：やっぱり、1番ですね。私は大学＝勉強という考え方で入学したから、出席もきちんとしてるし、遅刻もないし、単位も落としてないし。まじめにやってます。

(質 問)：周りの学生については

(回答1)：うるさくても、別にかまわない。自分がちゃんとやっていればいいと思

う。けど、真後ろで話されたり、うるさかったりするとちょっと腹が立つ。

回答1のような従来からいたいいわゆる「学習者タイプ」の学生である。成績や授業に対しては、自分の努力、意欲、態度として自己にその結果責任を求める傾向がある。多くが成績良好のため、テストやレポートなど、成績の指標についても要望がなく、なかには「点数だけ、実力でのみ」といった提案もあった。目的や目標をしっかりと持っており、授業や成績は、その目的を達成するためのひとつであると認識している。授業については、成績を厳格に正当に評価する授業において評価が高く、厳しい授業においても、成績評価が正当であれば、とくに要望がない。

(2) ニセ優等生タイプ

(質 問)：授業の出席はどうですか

(回答2)：きちんと出席してます。

(質 問)：何か目的があるのですか

(回答2)：今は目的はありません。目的がみつかった時を考えたら、授業に出ている方がいいかと思います。だから、まじめに授業には出ています。

(質 問)：授業では周りの人はどう？

(回答2)：基本的には気にならない。授業では前のほうで聞いているので、先生の話が聞けたらいいです。たまに、近くでうるさい人がいると嫌です。他人に迷惑をかけなければいいです。

こうした従来からいた真面目に学習に取り組むタイプの学生に対して、回答2のような「ニセ優等生」タイプの学生の出現がある。その特徴をひとことというなら、授業や成績については、実力よりは形式的な面を重要視してほしい

といったことがうかがえる。成績に対するコメントとしては「出席しているから」や「毎回のレポートや出席点も考慮」などがあった。授業に出席することが目的となっている学生が多数存在した。このタイプは、授業に出席していること、先生の話聞くことに意義を見出し、内容重視ではないのである。評価が甘く、出席を取る授業を好む傾向がある。一発勝負の授業ではなく、出席点やレポート点など総合的な評価を求める。

(3) 消費者タイプ

(質 問)：最近の学生についてどう思いますか？

(回答3)：とくに、一般教養や多人数の授業で私語が多くうるさい。もっと静かに授業が聞きたい。

(質 問)：周りの学生についてどう思いますか。

(回答3)：かなりむかつく。(沈黙)ほんとに邪魔しないほしい。

(質 問)：なぜ、そんなにむかつくのですか？

(回答3)：みんな、わかってるんですかね？ お金払ってるんですよ。僕の場合は、親に授業料を払ってもらってるからね……。自分で払っている人は知らないですが……。

これが最近になってその存在を顕著にしてきた「消費者タイプ」の学生である。このような学生は以前からごく少数存在したが、今回のインタビュー調査では、このタイプの学生が多く偏在していることが明らかとなった。下線部を見てもわかるように、「払っている」「お金」といったように、消費者意識を強く持っている。

しかし、近年話題になった『恐るべきお子さま大学生たち』⁽¹³⁾の著者ピーター・サックスが紹介したアメリカのカレッジ学生のような、授

業に対して「面白さ」や「楽しさ」を求め、なおかつ「評価が高い」ことを求める「消費者」意識だけしか持たない学生ではない。大学教育というサービスを通して、自分を社会に高く売り込むことができるような付加価値を得ることを、学費の対価として大学に要求するのである⁽¹⁴⁾。

消費者タイプの学生は、バブル経済の崩壊の時期から長期化する不況の負の「効果」によって登場してきたと予想される。未来に楽観できない危機意識から、投下した金額に見合うだけのものを得ないと納得できないタイプの学生である。その背景には、経済が低迷し、就職難や一流企業の倒産などによって、お金に対する意識が非常にシビアになっていることが考えられ、さらに、学歴だけでは、未来に対する期待がもてないことを知っている学生である。支払った対価分は、自分に還元されるべきであると思っている。そのため、こういう学生は「厳格型」といわれる授業を積極的に履修したり、その種の授業に対して高い評価を下し、対価に対する報酬を獲得しようと躍起になるのである。このタイプは、学習者（まじめで優秀）タイプの学生と同じように、成績の正当な評価を求める傾向が強く、相違点は教員に対する熱心な指導を求める点である。授業料に見合う、熱心な授業を求める傾向が高く、気質的には授業に対する価値意識が異なれば、かなり批判的に相手のことを論じるところにも特徴があった。

(4) 宇宙人タイプ

(質 問)：授業に対してどのように考えていますか？

(回 答)：何も考えてない。ただ授業に出てい
るだけ。とくにしたいことはない。

(質 問)：授業を選択する際の要件はなんですか。

(回 答)：とくになし。なんとなく（気が）あ
う先生とか、授業かな。

(質 問)：テストなどのことについては。

(回 答)：あんまり興味ない。

出席をとるやとらない、評価が厳格かどうか、あるいは熱心に授業をしてくれるかどうかのいずれにも執着がなく、単にその授業、あるいは教員が自分のフィーリングにあっているかどうかのみが評価の対象となっていると思われる。

このタイプは、もともと大学に行くことにも目的を見出していない学生が、社会に出ることからの緊急避難的に18～22歳という4年間を過ごすために、大学進学を選択した学生に多いと思われる。すなわち、彼らにとって大学は、モラトリアム期を埋めるための手段でしかないのである。このタイプの学生の多くは、大学生ライフを楽しむことが先行していて、何かの免許や資格をとりたいなどの目標もないため、当然、授業にも何も求めているのが特徴である。世間で言われるような価値意識ではなく、自分の価値観に執着したり、まったく何も興味を示さない、何を考えているかわからないタイプの学生である。

この「宇宙人タイプ」は、従来までにも存在した「レジャーランド型」の学生とどのように異なるのだろうか。それは、以下の2点である。

①就職の問題

以前のレジャーランド学生は、社会に出るときにはまじめになった(就職活動をして就職した)。それに対し宇宙人学生は、就職活動そのものにも利他的であるのが特徴である。

②出席の問題

レジャーランド学生は、大学生ライフを楽しむために授業に出席していなかったのに対し、宇宙人は授業には出席する傾向がある。

従来のレジャーランド型の学生は「出席を取らない、評価が甘い」といった「楽勝型タイプ」

の学生と同じ指標の中にいた。しかし、宇宙人はそこまで楽勝型に重きを置いているわけではない。それは、最近のFDの「ブーム」にのって、教育に熱心な教員が増え始めたことと無関係ではなさそうである。詳しくは後述するが、これまでは「評価が厳格であるのかあるいは甘いのか」や、「出席をとる・とらない」といった成績評価に関連した指標が授業評価の際に有効な変数であった。ところが、本調査からは、授業評価が評価にまつわることでなく、むしろ教員の授業に対する姿勢、すなわち、授業に熱心なのか、あるいは軽視しているのかという新たな軸が存在し、それが学生の授業評価の新たな軸となってきたものと思われる。

6. 新しいタイプの学生とその出現のプロセス

(1) 学生のタイプ分けとその分類軸

これまでは、学生をグループ化する際に、図9のモデルに示したような「評価」の軸が用いられることが一般的であった。それは、勉学に重きをおく学生と、勉学ではなく、学生生活に重点をおく学生とに分ける作業をする場合、「評価」が厳しくてもまじめに努力するタイプを「学習者型」に、評価の甘い授業を好んで選択するタイプを「楽勝型」に分類するために有効であった。

とりわけ、80年代の「大学レジャーランド論」といった風潮のなかでは、明らかに勉学重視というよりも大学生生活そのものを楽しむタイプの学生が顕著に現れるようになった。その

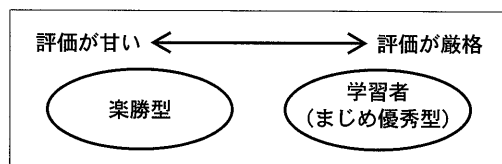


図9 学生タイプの分類（単一軸による）

ような学生は、授業においては、「楽に単位がとれる」が、第一義的な授業選択の基準となった。そこには、厳しい受験戦争に勝ち、大学はその疲れを癒す場として認識されていた一面もあったのである。

しかしながら、こうした二者択一的な学生の分類は、80年代の後半から次なるステージへと移行していく。すなわち、「評価」の軸だけでは分類することができないタイプの学生が出現してきたのである。その当時、語られた新しいタイプの学生は、60年代の池井、西川⁽¹⁵⁾が論じた「マジメ型」の学生と表面的には類似している。その特徴は、学業にも私生活にもまじめであり、授業には出席し、教員の紹介した本はできる限り読むように努めるタイプである。しかしながら、従来からいた「マジメ型」の学習者と決定的に異なる点は、授業に積極的に「出席」する点である。

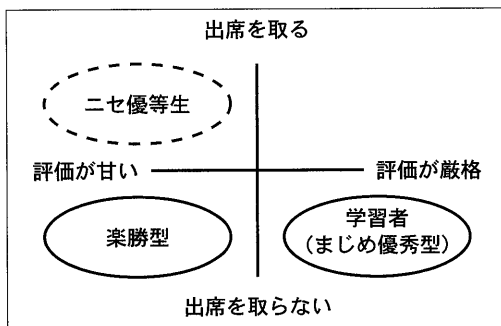


図10 2軸による学生タイプの分類

したがって、これまでの分類に用いられた「評価」の軸と、「出席」に代表される表面的な真面目さを表出する軸を交差させて4つの象限を作ることによって、さらに精緻なモデルの分析が可能となった。こうしてみると図10に点線で示したような「ニセ優等生」の存在がクローズアップされてくるのである。彼らは、「評価が甘く」、「出席をとる」といった授業を好む。その目的は、もっぱらよい成績をとるためであり、

その効果を就職に用いることで自己の存在をアピールするのである。「ニセ優等生」は、マジメで勉強することそのものを楽しむというわけでもなく、だからといって、楽勝型のような気楽な学生とも峻別されることを望むのである。

(2) 授業評価の時代の寵児？ 超児？

21世紀に入り、大学はその社会的役割を大きく変えようとしている。いいかえれば、これまで「研究」さえしていればよかった大学人に、「教育」という基準が求められるようになり、さらに、それを「評価」という時節の到来である。

こうした授業評価の時代に入って、さらに新しいタイプの大学生が登場してくることとなる。まさに、時代の「寵児」、あるいは「超児」と表記するほうがより適切かもしれないともいえるべき「消費者タイプ」の学生の存在がそれである。

その存在を明らかにするためには、図10のモデルにもう1本の補助線を引くことが求められる。すなわち、原点を中心に3次元に「講義に対して熱心か否か」、言い換えれば、担当者が教育にも関心をもっていることを求めるか、これまでのように研究重視でもよいと思うか、の軸を挿し込むことによって8つの象限による分析が可能となるのである。分析軸の背景には、安岡ら東海大学のグループや、大学教育学会における先行研究などを通して、「最近の学生のニーズが、教育技術にシフトしているのではないか」という指摘が散見されるようになってきたことがある。また、今回の授業アンケートの分析からも明らかのように、これまで厳しいという理由から忌避されてきた、いわゆる「厳格型」の授業においても、いくつか「評価が高い授業」のなかにランクインしてきたことも理由のひとつである。これまでの分析象限に、「講義に熱心を評価するか」という新たな軸を

加え、8象限にして考えると、これまで以上に「教育」を受けることに重点をおく学生の存在が明らかとなった。それが、「消費者タイプ」の学生である。ステレオタイプで表現すれば、彼らは、「評価が厳格」で、「出席をとり」、さらに「教育に熱心」な担当者の講義を高く評価する傾向がある（図11の点線囲み部、参照）。

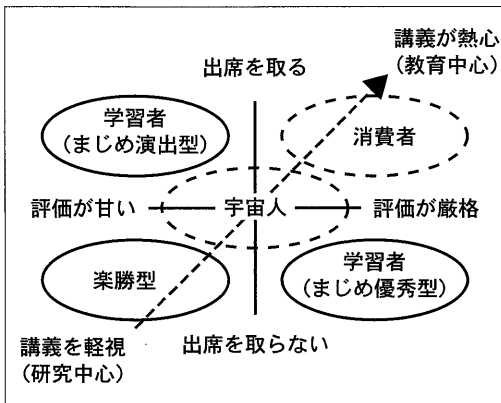


図 11 3軸による学生タイプの分類

すでにアメリカのカレッジでは、「消費者タイプ」の学生の登場がみられるという指摘があることは前述の通りであるが、ここでいう消費者はそれともやや性格を異にする。すなわち、「払ったもの（授業料）はモトをとる」というより、大学には「就職をするため」という明確な目的を持って進学し、勉強が嫌いではないから、サボっている学生とは峻別されることを求め、教員にも「高い授業料を払っているのだから、まじめにやってもらわなければ困る」という意義申し立ての権利意識をもっている学生群である。詳しくは、後述するが、とりわけ、バブル経済崩壊後の景気の長期低迷期を境にして、その存在がクローズアップされてきた感がある。

さらに、今回のアンケートやインタビューのなかには、そのいずれにも属さない「宇宙人タイプ」の学生も存在することが指摘された。消

費者タイプの出現の背景には、経済的な問題や就職の問題といった外的な要因が大きいと考えられるが、宇宙人タイプにはそうした基準も存在しない。しいて言えば、かつて、「スチューデント・アパシー」や「モラトリアム」といった言葉で表現されていたような学生群との類似点は非常に多い。それは、無気力や意欲減退、自己葛藤などといった共通点である。その反面、このタイプの特徴は、就職の時期においても何ら変化なく、大学で目標や、やりたいことが見つからなければ、見つけるまでその状況を模索するといった点があげられる。スチューデント・アパシーの場合は、勉学に対する意欲が喪失していたり極端に低かったりしても、日常生活においては普通であり、単位をとって卒業した後は、社会人として適応することができた。モラトリアムについても、たとえば栗原⁽¹⁶⁾が論じているように、「モラトリアムの内面化」をおこなうことで、大人の世界と青年の世界を一種の「二重意識」をもって、社会に適応していったのである。

その点、宇宙人は社会に適応しながら、模索するのではなく、いわばモラトリアム期間を半永久的に、自分が納得するまで継続するといった特徴をもつ。したがって、「社会への適応」という視点からは、これら2つとは大きく異なる。結局このタイプは、卒業後も「フリーター」などをしながら自分の「やりたいこと」や「やりたかったこと」を模索し続けるのである。

7. 新たな「教育評価」の時代

(1) 大学における「教育」という視点への注目

いずれにしても、学生のタイプを3軸によって分類することによって、先行研究で論じられてきたような学生群ではなく、まったく新しいタイプの出現を読み取ることができた。とくに、授業に対する軸を挿入したことにより、従

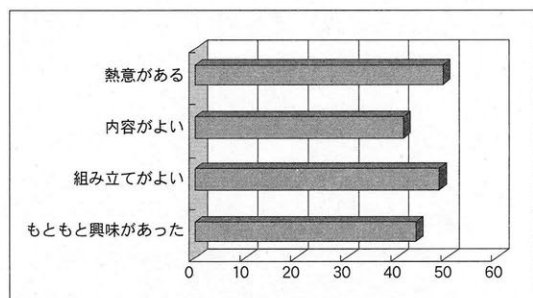


図 12 興味が増した理由

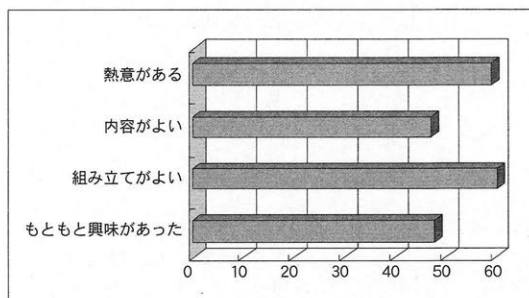


図 13 満足した理由

来ではわからなかった学生の存在が浮かび上がったのである。

そこで、最後に、その「教育」の側面に注目し、「学生が興味を増す」あるいは、「学生が満足する」授業の理由を探って、本稿のまとめとしたい。

図12、図13は、今回の授業評価アンケートから、それらの理由について複数回答による上位意見をまとめたものである。結果的には、教員が授業に「熱心である」や、授業の「組み立てがよい」といった項目が、授業への満足度や理解度にいずれも大きな影響を及ぼしていることがわかる。こうした結果は、今後の大学の教育を考えていくうえで示唆的であった。なぜならば、教員の熱意や、授業の組み立ては、大学の「教育」に注目しなければ光のあてられなかった項目ばかりが回答の上位に並ぶからである。

(2) 大学でも「教育」が求められる時代

－まとめにかえて－

今回の調査からは、以下の4点が整理された。

①学生の多様化による影響か、求める授業形態や形式が大きく異なること。

従来ならば、成績上位者と下位者との比較による、相違は報告されていたが、成績という指標で区切るのではなく、出席率という指標で区

切ることによって、新しい視点が見えてきた。具体的には、出席率上位では、厳しくなおかつ正当な成績評価である厳格型授業を好む傾向にあり、下位では、レポートや出席に比重がおかれ、フィールドワークや演習といった講義を好む傾向がある。

②ニセ優等生タイプの存在に加え、消費者タイプや宇宙人タイプの登場が確認できたこと。

これまでは、単一の分析軸によることにより、見えにくかった学生像に新たな展開を見出したことは、今回の調査の示唆的な部分であった。全体的な傾向としては、消費者の増加や、厳格型授業への評価が思った以上に上昇していることがわかった。厳格型は、レポートテストといった表面的な部分だけではなく、成績の正当な評価といった点が非常に重要なのである。

今後は、楽勝型から厳格型へと向かってさらに授業評価が転換することが予想され、大学教員の「教育」に対する認識も変えていかざるを得なくなることは必然であろう。

③新たな「教育評価の時代」の到来が予見できたこと。

これまで日本の大学は、もっぱら「研究」が中心であったため、「教育」は重要視されてこなかった。しかし、この点の認識の変化が、大学の生き残りにとって重要な要因となるであらう

うことは論を待たない。天野もアメリカの例を挙げながら、「学生による授業評価が大学の質を維持していくために最重要である」ことを論じている⁽¹⁷⁾。授業への取り組みを考える上では、カリキュラムの変革や再編成、内容についても検討する余地があろう。

④教員が授業改善をおこなう際には、教育方法や教授法といったスキルも求められること。

具体的には、寺崎（2002）⁽¹⁸⁾のいう双方向的な授業展開や情報機器を使用した授業など、多くの研究者が授業実践の例をあげ、その効果を報告している。また、「教えること」に視点をあてた岩田（2000）⁽¹⁹⁾や、安河内（2000）⁽²⁰⁾の「授業とは、学生に伝えなければならない」という指摘は示唆に富むものがある。大学教員は、「教育」の重要性を認識し、授業方法の改善や開発をさらに進めていかなければならない。

授業評価の本来の目的は、学生の授業に対する姿勢の自己確認、評価や学問への意識の喚起、授業方法や内容のチェックと教員の授業改善や方法や内容の見直し等であるといわれる。すなわち、学生自身と教員の学問に対する質の向上と、その確認のための機能を果たすものが授業評価なのである。

この点について大宮は、アメリカの例を提示しながらそれを明確に示している。「欧米の大学は、教員も学生もつねに厳しい評価を受ける。大学が大衆化したからといってにわかに厳格な成績評価をすることで対応しようとしているのではなく、授業やカリキュラムの改善によって教育の質を向上する努力を展開している」⁽²¹⁾。こうした指摘からもわかるように、授業評価は一元的なレベル、つまり「評価するだけ」で終わるのではなく、それに基づいた改善や質の向上に取り組むことこそが重要である。しかしながら、日本での現状を考え合わせてみると、教

員の意識としては、とりあえず評価に参加することに意味をおいている傾向が強い。また、その評価も、必ずしも教育の改善につながらない場合が多いように感じる。このような傾向が続けば、評価する「消費者」としての学生側にも授業評価に対する不信感が出てくることは十分に予想される。

しかし、だからといって「何がなんでも評価ありき」と論じているわけでもない。荻谷（1995）⁽²²⁾や天城（1995）⁽²³⁾も指摘するように、学生の授業評価には、一方でいくつかの問題点が存することもまた事実である。具体的には、まず、評価する学生自身が授業を相対化して評価する基準をもつことができるか、という点である。確たる評価基準を個々の学生がもっているとは考えがたく、今回提示したように、学生の価値観もまた多様なのである。ひとくちに「満足度」といった場合も、満足が純粹に授業評価に反映しているとはいいがたいのではないだろうか。

もうひとつは、アメリカのシステムのように、「授業」の評価といった場合は、その結果が教員の給料や昇進に影響を与える危険性がある点である。いたずらに評価値を上げようとするれば、ただ面白いだけの漫談型の授業や、よい成績をつける授業に評価が高くなるといった「成績の安売りやインフレ」⁽²⁴⁾が起こらないとも限らない。それこそ、本末転倒な現象である。

大学冬の時代が叫ばれて久しいが、このような点も考慮すると、これまでのような単なる「授業評価」の時代は次第に終焉を迎え、今後は、本質的な「教育の評価」の時代へと変化していくであろうし、それこそが本格的な大学の構造転換をもたらす起爆剤となるであろう。

附記：本稿は、原が平成15年度に佛教大学特別研究助成を受けておこなった調査研究の成果の一部である。

【注】

- (1) 一般教育学会誌編集委員会「一般教育学会誌 第9巻 第1号」1987年、浜野一彦「FDアンケート調査実施の経過について」pp.52-72
- (2) 喜多村和之『学生消費の時代』玉川大学出版部 1996年 pp.36-42
- (3) 荻谷剛彦編『キャンパスは変わる』玉川大学出版部 1995年 中野収「“脱近代”意識の学生像」pp.120-131
- (4) 同上書 島田博司「教師から見た「私語」問題」pp.59-71
- (5) 同上書 荻谷剛彦「変貌するキャンパス」pp.9-35
- (6) 関西大学社会学部自己点検・評価委員会『「入学時基礎調査」報告書』1994年
- (7) 前掲書 荻谷剛彦「変貌するキャンパス」pp.17-18
- (8) 一般教育学会誌編集委員会「一般教育学会誌 第8巻 第2号」1986年、安岡高志ほか「学生の講義評価」pp.50-60
- (9) 一般教育学会誌編集委員会「一般教育学会誌 第8巻 第1号」1986年、安岡高志ほか「学生の講義評価」pp.46-59
- (10) 一般教育学会誌編集委員会「一般教育学会誌 第11巻 第2号」1989年、安岡高志ほか「学生の講義評価 —成績と講義評価の関係—」pp.99-102
- (11) 一般教育学会誌編集委員会「一般教育学会誌 第19巻 第1号」1997年、安岡高志ほか「授業改善に対する学生の要求」pp.84-93
- (12) 大学教育学会誌編集委員会「大学教育学会誌 第22巻 第1号」2000年、平野真「大学授業に対する学生の「好み」の分析」pp.82-93
- (13) ピーター・サックス著／後藤将之訳『恐るべきお子さま大学生たち』2000年 pp.104-113
- (14) 喜多村和之 前掲書 pp.228-229
- (15) 池井望・西川富雄『大学生・教授の生態 —現代学生かたぎと教授の生態—』雄渾社 1966年 pp.176-191
- (16) 栗原彬『やさしさのゆくえ＝現代青年論』筑摩書房 1981年 pp.134-137
- (17) 天野郁夫『大学改革のゆくえ』玉川大学出版会 2001年 pp.98-100
- (18) 寺崎昌男『大学教育の可能性』東信堂 2002年 pp.34-38
- (19) 岩田年浩『教授が変われば大学は変わる』毎日新聞社 2000年 pp.104-113
- (20) 安河内哲也『それでいいのか？ 大学生！』株式会社ナガセ 2000年 pp.38-53
- (21) 大宮知信『学ばず教えずの大学はもういない』草思社 2000年 p.206
- (22) 荻谷剛彦編 前掲書 pp.91-103
- (23) 天城 勲『大学の改革 —内と外—』玉川大学出版部 1995年 pp.36-40
- (24) ピーター・サックス著 前掲書 pp.205-210

【参考文献】

- 天城 勲『大学の改革 —内と外—』玉川大学出版部 1995年
- 荻谷剛彦編『キャンパスは変わる』玉川大学出版部 1995年
- 喜多村和之『学生消費の時代』玉川出版部 1996年
- ピーター・サックス著／後藤将之訳『恐るべきお子さま大学生たち』草思社 2000年
- A・レヴィーン著／丹治めぐみ訳『現代アメリカ大学群像』2000年
- 日本教育社会学会編『教育社会学研究 第70集 —特集1990年代— 教育変動の諸相』2002年
- 絹川正吉『大学教育の本質』ユーリーグ株式会社 1995年
- 寺崎昌男『大学教育の可能性』東信堂 2002年
- 天野郁夫『大学改革のゆくえ』玉川大学出版会 2001年
- 日本私立大学連盟編『大学の教育・授業をどうする』東海大学出版会1999年
- 日本私立大学連盟編『大学の教育・授業の未来像』東海大学出版会2001年
- 宇佐美寛『大学の授業』東信堂 1999年